人間文化創成科学論叢　第23巻　2020年

2010年以降の『不思議の国のアリス』翻訳における内容の変更点の分析

―「幼児向け」の本となる上で加えられる配慮とは何か―

小坂田　摩由*

Analysis of content changes in the translation of *Alice's Adventures in Wonderland* since 2010:

What are the considerations added to making a book for young children?

OSAKADA Mayu

Abstract

This paper examines points taken into consideration in order to make the contents suitable for young children when books for young children are published in Japan since 2010. So I focused on *Alice's adventures in Wonderland*, a world-famous children's literature.

I analyzed the content of this work and its 26 Japanese translations for young children. I also compared the contents of *the Nursery "Alice"*, which is a work rewritten by the author for 0-5 years old, and the contents of translated works for young children in Japan since 2010.

As a result, it was found that the images of some characters and scenes changed significantly. All the changed images were that brought anxiety to the main character Alice, such as identity and danger of life. These have been removed from current Japanese translations, and new bright and secure images have been added.

In addition, consideration has been taken to ensure that children who experience the world of the story with the main character Alice are physically and mentally safe from beginning to end.

In Japan since 2010, publishing bright-image books for young children takes precedence over publishing stories that are true to the original.

Keywords：books for young children, *Alice's adventures in Wonderland*, *the Nursery "Alice"*, translations, storytelling

1　はじめに：問題の所在

1-1　『不思議の国のアリス』翻訳作品の日本における現状とその改変作品

本論文は、現在の日本において子ども、特に幼児という低年齢向けの本が出版される際、幼児に相応しい内容とするためどこに重点が置かれ、いかなる配慮がされるか検討するものである。そのため、世界的に有名な児童文学『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*、以下本文中では『不思議の国』と略記）の日本語翻訳作品を中心に、ストーリー展開や登場人物の発言等、作品の内容に着目した分析を行う。

『不思議の国』は、イギリスのルイス・キャロル（Lewis. Carroll）による1865年の作品である。当時10歳だっ

キーワード：幼児向けの本、『不思議の国のアリス』、『子ども部屋のアリス』、翻訳、読み聞かせ

＊平成31年度生　人間発達科学専攻

た実在の少女アリス・リデルに贈った個人的な作品から生まれた本作は、出版されるや多くの子どもたちの心を掴んだ。川端（2013：31）は本作品を「既存の児童文学にどうしてもしみついてはなれなかった教訓主義を撤廃したばかりか、パロディによって笑いとばすという快挙をなしとげ、ほんとうに子どもの楽しみのために書かれた児童文学の嚆矢となった」と評価する。子どもが好む言葉遊びを駆使し、風刺をちりばめた本作品は、子どもへの教訓・説教じみた内容でないという点で画期的であった。

『不思議の国』は20世紀には全世界で聖書に次いで多くの言語に翻訳されたと言われるが（カーペンター&プリチャード 1999：15-18）、特に日本では初訳以降、抄訳や翻案を含め膨大な種類の翻訳が世に出され続けている。しかし作中の言葉遊びは英語で読むからこそ楽しく、風刺もキャロルが生きたヴィクトリア朝社会に対するものである（千森2015：199）。従ってただの和訳ではこのおもしろさの再現は難しく、日本では1908年以降沢山の作家・詩人・翻訳家などが翻訳に挑戦している[(1)]。その流れの中で、10歳の少女向けであった物語をより小さな幼児向けに改変する例もある。

原作者キャロルも、自ら『不思議の国』に手を加えている。0～5歳児向け『不思議の国』という立ち位置で『子ども部屋のアリス』（*The Nursery "Alice"*、以下本文中では『子ども部屋』と略記）と題されたこの改作は、1890年に出版された。「『不思議の国のアリス』の対象年齢は5歳以上であり、ゼロ歳から5歳までの子どもが、読者の空白地帯になってしまうことが、キャロルは、ずっと気がかりだった」（安井 2015：110）という本作品の成立背景から、キャロルが自作の読者として乳幼児をも考慮していたことがわかる。文章量の削減だけでなく新たな挿話も見られ、語り手が読者に話しかける形をとる『子ども部屋』は日本では『不思議の国』ほど知名度はないが、今から約150年前、現在の日本で言う就学前の乳幼児まで読者対象として考慮されていたことは特筆すべきである。

1-2　先行研究：『不思議の国のアリス』のこれまでの分析

『不思議の国』に関する研究は日本に限っても数多く存在する。特に翻訳に関する先行研究では、楠本（2001）と千森（2015）が1908年から昭和の途中までの翻案・翻訳の変遷を詳しく追っている。2000年以降の新しい翻訳を分析対象とするものには金子（2018）や小林（2004）があるが、分析対象は原文に忠実な完訳であることが重要視されており、必ずしも完訳でない子ども向けの訳は分析には不適格とされる傾向がある。つまり日本の『不思議の国』の内容に関する研究には、この作品を本来の児童文学という立場からではなく、一般の文学と同様の視点で分析していると言える。笹田（2016）は数少ない『子ども部屋』を中心とした分析だが、語りの技法と挿絵の役割に着目しており、話の展開や登場人物の分析は見られない。現在の日本における種々の『不思議の国』を扱う研究としては小坂田（2019）があるが、挿絵の種類やアリスの服装など視覚的な面に着目しており、翻訳の内容における差異には言及していない。

日本で現在一般向け『不思議の国』と、幼い子ども向け『不思議の国』が同時に出版されている構図は、キャロルが『不思議の国』を幼児向けに『子ども部屋』へ改作した構図と重なる。しかし、日本の幼児向け翻訳の全てにキャロル自身の改変と同じ変化がみられるとは考えにくく、相違点が存在する可能性がある（図１）。相違点が存在し、その結果作品のイメージが変化するならば、作者キャロルの考える「幼児向け」と、現在の翻訳者が考える「幼児向け」は異なると言える。しかし、この視点から内容を分析する研究は見られない。

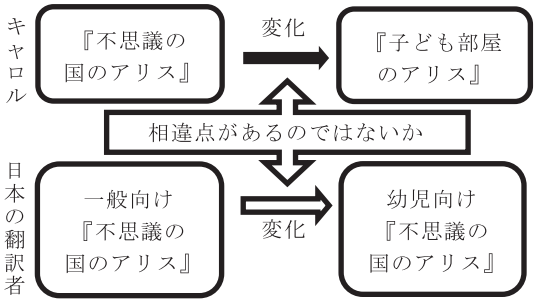

図１　本研究の着目点（筆者が作成）

以上を踏まえ本研究の目的は、現在の日本で「幼児向け」の『不思議の国』出版時に重要視される点や配慮を、特に物語の内容や登場人物に着目して明らかにすることである。

2　研究対象と方法

本論文では、2010年以降の日本で出版された『不思議の国』のうち、『子ども部屋』と同様に対象年齢に０～５歳を含むと書籍に明記されているか、『母と子の読み聞かせえほん』のように読み聞かせが目的と明確に判断できる26冊を選出した（表１）。2010年以降を対象としたのは、2010年が日本における「幼児向け」の『不思議の国』翻訳において、転換点と言えるからである。まずそれ以前の約20年（1989～2009）と比較して、2010年以降の10年未満（2010～2018）において、『不思議の国』翻訳作品は子ども向けに限っても約1.5倍出版されている。

表１　分析対象ブックリスト

No.	訳者名	出版年	題名	書籍名	出版社	ページ
1	熊田千佳慕	2010	ふしぎのくにのアリス	熊田千佳慕メルヘンの世界１　ライオンのめがね・ふしぎのくにのアリス	小学館	33-76
2	立原えりか	2010	ふしぎの国のアリス	母と子の読み聞かせえほん　女の子がだ～いすきなお話	ナツメ社	240-249
3	特定不能	2011	ふしぎの国のアリス（前編・後編）	子どもが眠るまえに読んであげたい　365のみじかいお話（田島信元監修）	永岡書店	44-45
4	はやかわゆか	2011	ふしぎの国のアリス		大日本絵画	全16頁
5	ささきあり	2012	ふしぎのくにのアリス	ゆめいっぱい・みんなプリンセス　おんなのこのめいさくえほん　全24話	西東社	156-167
6	千葉幹夫	2012	ふしぎの国のアリス①②	母と子の心がふれあう名作のきらめき365話	ナツメ社	134,135
7	山田理加子	2012	ふしぎのくにのアリス	キラキラ☆ラブリー女の子のおはなし宝石箱	ナツメ社	132-143
8	麻生かづこ	2013	ふしぎの国のアリス	もっと! 考える力を育てるお話366	PHP研究所	158-159
9	立原えりか	2013	ふしぎの国のアリス	プリンセスがいっぱい！キラキラかわいいおんなのこのおはなし	ナツメ社	192-201
10	立原えりか	2013	ふしぎの国のアリス	田村セツコのおしゃれでおちゃめな女のコたち　心ときめく☆夢みるプリンセスの物語	ナツメ社	6-17
11	廣嶋玲子	2013	ふしぎの国のアリス	ゆめはかなう！あなたもプリンセス　おんなのこのめいさく	新星出版社	54-65
12	山本省三	2014	ふしぎの国のアリス	本好きの子どもに育つ世界名作童話集（青木伸生監修）	チャイルド本社	56-65
13	いしいいくよ	2014	ふしぎの国のアリス	やさしい思いやりの心をはぐくむ　女の子のお話（内田伸子監修）	ナツメ社	20-23
14	堀切リエ	2014	不思議の国のアリス	子どもに読んであげたい365日のおはなし（野上暁編）	成美堂出版	46
15	夢姫	2014	不思議の国のアリス	こころのごちそう　名作絵本きょうのおはなし①～グリム・ペロー・アンデルセン・世界のおはなし編～	第三文明社	34-35
16	特定不能	2014	ふしぎの国のアリス	頭のいい子を育てる世界のおはなし　ハンディタイプ	主婦の友社	72-73
17	横田朋子	2015	ふしぎの国のアリス	こころを育てるおはなし101（秋田喜代美監修）	高橋書店	260-263
18	きたなおこ	2015	ふしぎの国のアリス		大日本絵画	全22頁
19	特定不能	2015	ふしぎの国のアリス	女の子のてのひら名作えほん　全100話（西東社編集部編）	西東社	172-177
20	麻生かづこ	2016	ふしぎの国のアリス	ポケット版　もっと！考える力を育てるお話100	PHP研究所	160-163
21	ささきあり	2016	ふしぎの国のアリス	おんなのこめいさくえほん　ベストセレクション80	西東社	292-299
22	特定不能	2016	ふしぎの国のアリス	心をはぐくむ　てのひら名作えほん　全100話（西東社編集部編）	西東社	272-275
23	宇津原ゆかり	2017	ふしぎの国のアリス		ニジノ絵本屋	全36頁
24	ささきあり	2018	ふしぎのくにのアリス	ウキウキたのしい おんなのこの めいさくだいすき	西東社	4-15
25	特定不能	2018	不思議の国のアリス	脳の専門家が選んだ「賢い子」を育てる100のものがたり（瀧靖之監修）	宝島社	108-111
26	中脇初枝	2018	ふしぎの国のアリス		ポプラ社	全47頁

また「幼児向け」の読み聞かせを目的とした『不思議の国』が出版され始め、本作品の対象のさらなる低年齢化が起きているのも2010年以降である[2]。比較のため参照した原文は、『不思議の国』は閲覧可能であった1886年の増補版*Alice's Adventures in Wonderland*、『子ども部屋』は1890年の第二版*The Nursery "Alice"*[3]である。

物語の内容を分析する方法は、主に英文学研究における解釈論の手法を参考にした。主に小西（2017）や金子（2018）の『不思議の国』分析における、登場人物やエピソードごとに物語を分割し引用した上で、その場面がストーリー上いかなる意味を持つかについての解釈・原文との比較検討を行う手法をモデルとした。まず上記26冊の内容を網羅し、出現する登場人物とエピソードの整理を行った。その結果、特に原作から変化・消去の多い登場人物やエピソードを５種（3-1：イモ虫、3-2：公爵夫人、3-3：お茶会、3-4：ニセウミガメ、3-5：ハートの女王さま）選出することができた。その後、それぞれの場面のもつ意味について分析・解釈を行った。また、『子ども部屋』での作者キャロルが行った改変と比較し、日本の「幼児向け」翻訳作品ではどう変更されているのか探った。

着目したエピソードの解釈に関しては、安藤（2006）、川端（1990）、高橋（1977）、千森（2015）、三上（1994）らの先行研究における、『不思議の国』の登場人物が物語の中で持つ役割や象徴しているイメージの解釈を参考としつつ、分析を行った。

3　内容の分析

3-1　アイデンティティの問題を突き付ける存在の消失：イモ虫の場合

不思議の国を彷徨うアリスは、第５章で偏屈なイモ虫と会う。「おまえは誰だ」と尋ねられるも、体の伸縮などで混乱中のアリスは返答できない。しかし彼はアリスに非共感的で、いつもと違う大きさにもやがて慣れると言う。最後にはアリスに体の伸縮を操作できるキノコを授けるが、そのときもアリスを煙に巻く助言しかしない（Carroll 1886：59-69）。

イモ虫を、川端（1990：19-20）は「道案内のOld Wise Man」と捉える。その上で『不思議の国』は「庭」の形で現れた楽園をアリスが探求する物語であり、「庭」は彼女の成長の目的地という意味を持つ。身長を操作できるキノコを授ける点でイモ虫は親切な道案内だが、その前にアリスは「お前は誰だ」と問われ、アイデンティティに真正面から向き合う。これを乗り越えキノコを得なければ、アリスは成長の目的地「庭」に近づけない。従って川端の指摘するように、イモ虫はアリスが挑むべきOld Wise Manと解釈できる。

キャロルの『子ども部屋』ではこの会話に改変があり、イモ虫はアリスに最初からキノコの使い方を親切に教えてくれる（Carroll 1890：25-8）。キャロルは、０～５歳児にアイデンティティの問題を正面から突き付けようとは考えなかった可能性が高い。

一方日本の翻訳作品においては、当エピソードがストーリーから削除されているものは26冊中８冊、エピソードに変化があるものは17冊である[4]。変化例を以下に挙げる。

> アリスが森の中をうろうろしていると、きのこの上の　いもむしが話しかけてきました。
> 「何かこまっているのかい？」
> 「あたし、もう少し、大きくなりたいの。」
> 「きのこの　かたがわ食べると　大きくなって、はんたい食べたら小さくなる。」
> いもむしはそう言いのこし、くさむらに入っていきます。（リストNo.13：60）

このように幼児向け作品ではイモ虫はアリスの要求に応えてくれるばかりか、親切にも先に声をかけてくる。これによってイモ虫のアリスがアイデンティティに挑み、成長の地へ近づくためのOld Wise Man的存在という意味合いは、完全に消失していると言える。

3-2　役割を押し付ける母親の消失：公爵夫人と赤ん坊の場合

第６章で、アリスはコショウの匂いのたちこめる公爵夫人の家で赤ん坊を抱いた公爵夫人とスープにコショウ

を入れすぎている料理人らに出会う。夫人は自分の赤ん坊をブタ呼ばわりした挙句、アリスに赤ん坊を放ると出て行ってしまう（Carroll 1886：76-86）。

この場面について三上（1994：128-9）は「子どもが増えて、家事全般に追われる母親は、家の外に出る機会もかぎられ、動くことを制限された、本来能動態である身体の態勢、勢いが、行き場を失って〈心〉に圧力をかけ（ストレス）、（中略）母親の〈心〉にかかった圧力は、母親自身をつぶすか、あるいは家の者、なかでも弱い立場にある子どもをつぶす力として発散されるほかなくなります」と述べる。「母親」は公爵夫人、「子ども」は赤ん坊に相当する。アリスは、弱い立場である子どもを自ら虐げる母親の姿を見せつけられているのである。また三上（1994：132）によれば、全てに同一性を強制する権力者である公爵夫人の周囲のものはみな、同一性の論理により役割を固定されている。しかし、赤ん坊は例外である。「赤ちゃんはまだどんな役割のなかにも固定されず、何かのための道具ではないから」（三上, 1994：132）である。とはいえ「この家にいて胡椒（同一性）のピリピリする空気を吸っている」（同）赤ん坊も、危うい存在であることには変わりない。

キャロルの『子ども部屋』でこの場面は軽量化されているものの、ブタ呼ばわりは残され、アリスはやはり赤ん坊を投げつけられ逃げ出す（Carroll 1890：29-31）。作者はこの作品の対象年齢を０～５歳とした上で、公爵夫人と赤ん坊を据え置いたと考えるのが自然であろう。主人公のモデルとされるアリス・リデルが幼少期にキャロルと親しかったことは周知の事実だが、母リデル夫人は娘が成長し結婚を意識するにつれ交流を快く思わなくなり、キャロルは次第に遠ざけられたという[(5)]。そのキャロルが、アリスを当時の隷属的な結婚制度に押しやる母という存在に、何も感じなかったとは考えられていない。

しかし日本の幼児向け作品では、当エピソードが削除されているものが20冊、変化しているものが５冊となっている。このエピソードを残しているもののひとつが以下である。

> 家の中では、こうしゃくふじんとコックがおおげんかのまっさいちゅう。アリスはこうしゃくふじんから、赤んぼうをあやすように言われましたが、赤んぼうがブタになってしまったので、にげだしました。
> （リストNo.11：61）

元来、読者は主人公アリスに心を寄せて話を読むことが前提であろう。しかし読者の年齢層を下げた場合、読者にとってより近しいのはアリスよりも赤ん坊である。さらに日本の乳幼児向け『不思議の国』は、必然的に親子が同時に楽しむ読み聞かせ用となる。親の立場になったとき、赤ん坊を虐げる母親を我が子に聞かせたがる親が果たしているだろうか。結果、このエピソードは消失するか、軽く触れられるだけに変化したと考えられる。

先の引用部分での公爵夫人は、子どもの前で大喧嘩する点では良い母親ではない。しかしこの表現では、公爵夫人はコックと決着をつけるためアリスに赤ん坊を渡したとも解釈できる。少なくともこの表現では赤ん坊がブタと化したことと公爵夫人に関連は見いだせず、従って公爵夫人は全てに同一性を強制する権力者から変化している。

公爵夫人の場面が省略された作品が収められている作品集の一つであるリストNo.25の監修者瀧靖之は、この本に触れ子どもの興味の幅を広げさせることを親へ奨励している（瀧　2018）。またリストNo.13の監修者内田伸子は、「はじめに」で「子どもの個性を大切に」（内田 2014：2）と述べる。このように親が子に与えることが前提の作品集は、子どもの可能性を広げるには様々な物語が必要という立場に立っている。その中で我が子の可能性を考えず、最終的に本当に赤ん坊をブタに変えてしまう公爵夫人は不必要となり、存在を抹消されるか、原作より赤ん坊に害のない母親像に変化させられていると考えられる。

3-3　進み続ける時間：へんなお茶会の場合

アリスは第７章で帽子屋らによる終わりのないお茶会に参加する。終わりがないのは帽子屋が以前「時間」に暴力を振るったことで「時間」の反感を買い、懐中時計が６を時で止められてしまったからである。アリスはこのお茶会にしばらく付き合うが、無礼な口を何度もきかれて愛想を尽かし、立ち去る（Carroll 1886：95-111）。

「時間」に対するキャロルの意識について、高橋（1997：110）は「《成長すること》を拒否し《表層》に固着しようとするキャロルおよび人物から見て、とりわけ許しがたいのは《時間》である。これこそ《成長》をもた

らし、《表層》に《深さ》を与えて《現実》たらしめてしまう元凶だからである」と指摘する。また、『鏡の国のアリス』の登場人物ハンプティ・ダンプティの台詞も同様の話題に括り、「ハンプティ・ダンプティがアリスに向かって「あんた、七歳で止まっておくべきだったね」と嫌味を言ったのも、アリスが体現する《時間》への恨みにほかならない」（高橋 1997：110）と解釈する。この嫌味については、千森（2015：p.49）も「この横柄とも思える言葉に、アリスが子どものままでいてくれればと願う著者キャロルの苛立ち、悲しみ、あきらめが投影されている」と言及する。

『子ども部屋』で当場面は残されているが、帽子屋と「時間」の話は削除された（Carroll 1890：37-40）。キャロルはアイデンティティの問題同様、０～５歳児に「時間」への反感をぶつけようとはしていない。この年齢は10歳のアリス・リデルのようなキャロルが愛した少女の年齢より前であるため、ここで時間を留めたくないと考えた可能性もある。

一方日本の幼児向け翻訳作品において、このエピソードが削除されているものは26冊中３冊、変化があるものは19冊である。変化したストーリー展開の例を、以下に挙げる。

アリスが近づくと、三月ウサギが言いました。
「すわるイスは、ひとつもなーいよ。」
「まあ、たくさんあるのに、いじわるね。」
「さあ、お茶のおかわりを、もっとどーうぞ。」
「まだなにも、いただいてないわ！」
アリスはぷんぷんおこって歩きました。（リストNo.13：22-3）

上記の場合、お茶会と時間の関係に触れないまま、アリスは去ってしまうことになる。またこの場面には「たんじょうびでない　ひを／おいわいするために、おちゃかいは／ずーっと　つづいているのです」（リストNo.7：138）という改変例も存在する。この場合、「たんじょうびでない　ひを　おいわいするため」という能動的かつ明らかに原作とは異なる目的が、お茶会に付け加えられていると言える[(6)]。

少女アリスを大人に変える「時間」が暴力によって強制的に止められたお茶会の場面は、キャロルによる「時間」への反感の表れと捉えられる。しかし日本の幼児向け翻訳作品は「時間」に言及せず、キャロルが終わらないお茶会に込めた主張は切り捨てられている。また、能動的な「おいわい」という目的でお茶会が開かれている場合は、暴力で時間が止まるという攻撃的な要素が薄れ、陽気なイメージが付加されると考えられる。

3-4　希薄化する死の影：ニセウミガメの場合

第９、10章でアリスが出会うのは、ニセウミガメとグリフォンである。ニセウミガメとはキャロルの創造物で、ニセウミガメスープの材料になる生物と紹介される。ニセウミガメは淋しそうに座っていたり大きなため息をついたりといかにも悲しげで、アリスが彼の身の上話をグリフォンと一緒に聞いたり、彼とグリフォンのダンスを見たり歌を聴いたりする間も、終始明るい表情ではない（Carroll 1886：130-61）。

安藤はここに『不思議の国』の重要な主題として「死」を関連付け、「不可避的な変化をもたらす『時間』はつねに終末に向かって進行するものであり、すべてのものの変化の終着点は必然的に死である。（中略）この意味で重要な挿話は『狂気の茶会』と『偽海亀の回想』であろう。これらのいずれもが、ひとつには終末のオブセッションにとりつかれた者たちがそれを必死に避けようとしている挿話だからである」（安藤 2006：39）と述べる。スープになる運命のニセウミガメは「終末のオブセッションにとりつかれた者」にならざるを得ない。彼の悲しみには、確かな理由があるのである。

また三上は、ニセウミガメらのダンスを「人間に料理される生き物たちが最後に踊り狂う死のダンスにほかなりません。最初のステップが最期のステップなのです（中略）人間に食われることを唯一の〈目的〉として宿命的に押しつけられ、それを拒否することのできない哀れな生き物たちの現実を、ウミガメモドキは自分では知らずに切々と語ってしまっていたのです」（三上 1994：166-7）と解釈する。ダンスさえも、本来スープにされる運命のニセウミガメが最期に歌い踊る、「死」に色濃く染まったものなのである。

キャロルによる『子ども部屋』には、短いながらニセウミガメとグリフォンは登場する。本文中の語り手はニセウミガメを、頭が子ウシのようであり、ニセのウミガメスープには子ウシの頭を使うと説明する（Carroll 1890：47）。この説明だけを聞いて「ニセウミガメとはニセウミガメスープの材料である」と読み取るのは０～５歳児には難しいが、完全に説明を削除してはいないのも事実であり、ニセウミガメとスープの関連性も消滅したとは言えない。キャロルはニセウミガメとニセウミガメスープの関連を語り手として指摘することで、ニセウミガメの背後にある「死」を希薄化しつつも残していると考えられる。

一方日本の幼児向け翻訳『不思議の国』では、この章が削除されたものが26冊中25冊、改変されたものは１冊である[(7)]。この改変された唯一の幼児向け翻訳では、場面の雰囲気に変化が見られる。「アリスは、うみの　そこのがっこうの　はなしを　きいたり、たのしい　「スープの　うた」をきかせて　もらいました。／ふたりの　ゆかいな　ダンスも、みせて　もらいました」（リストNo.1：63）というものである。「たのしい」「ゆかいな」という表現が入り、ニセウミガメの寂しそうな様子は全くない。悲哀の言葉を削り、楽しそうな雰囲気の言葉を加えて、死の影を薄れさせ明るく変化させている。またニセウミガメの解説もなく、読者はニセウミガメがスープの材料と気づくことができない。ニセウミガメの運命が伏せられた以上、ここから「死」というテーマを読み取ることは難しい。

3-5　希薄化する死の影：ハートの女王さまの場合

ハートの女王さまは、物語が山場へ向かう第８章以降に現れる。アリスは女王さまに最初こそ丁寧に自己紹介するが、直後に生意気な口をきいて怒りを買い、「首をはねよ！」と叫ばれる。この場ではアリスは刑を免れるが、第12章で理不尽な裁判に歯向かうアリスは再び女王さまから「首をはねよ！」と言われてしまう（Carroll 1886：115-8, 187）。

安藤は、「首をはねよ！」を連発するハートの女王さまについて「彼女が終末や死をもたらす者、すなわち時間の具現化だからである」（安藤 2006：40）と解釈する。確かに「首をはねよ！」と簡潔な死刑宣告を放つ彼女は、ゆき着く先は死である時間と関係が深いと考えられる。高橋もこの物語におけるアリスのアイデンティティ喪失という問題とハートの女王さまの台詞を「死」に関連付け、「不思議の国でアリスを翻弄する様々なものの極致こそ「自己同一性喪失の最後のかたち」としての死であり、「《死》のモチーフは、冗談というにはしつこすぎる頻度をもって出没していたのである。アリスの自我の根拠を否定しつくすこの不条理の国において、彼女の《受難》の行きつく先は、論理的帰結として《死》しかないはずである。すなわち彼女の存在がチェシャー猫の肉体のごとく消滅する地点である」（高橋 1977：101）と解釈する。時間の権化として死をもたらす者である女王さまが話の山場で登場するのは、アリスが受け得る不条理の中でもアイデンティティ喪失の最後の形である死以上はあり得ず、従って物語はここで終わらざるを得ないからだ。

キャロルによる『子ども部屋』では語り手が、女王さまが実際に現れる前から、彼女は「首をはねよ！」を連発すると読者に教える（Carroll 1890：42-3）。そしてアリスが再び「首をはねよ！」と言われる最後の場面では、語り手は情景を語るだけでなく「首をはねよ！」が女王さまの口癖だと再度言及する（Carroll 1890：56）。この台詞が常套句であることを、キャロルは表現の方法を工夫し読者に思い出させようとしていると言える。

一方日本の幼児向け翻訳作品においては、ハートの女王さまの存在そのものを削除しているものは見受けられなかった。内容を変化させることで存在感を薄めているものが、26冊中４冊存在する。女王さまとアリスのやり取りが変化した翻訳を、以下に挙げる。

「おめにかかれてこうえいです」
アリスが　かしこまってあたまを　さげると　じょうおうさまは
「おまえもいっしょに　クロケットのしあいを　しなさい」といいました。（リストNo.23：27）

女王さまは礼儀正しいアリスを気に入り、首をはねようとはせず、遊びに誘っている。

3-1より、アイデンティティ喪失という話題は既に「幼児向けでない」とわかる。その話題が辿り着く最終地点「死」は、ニセウミガメのようにアリスに直接関係ない場合にも削除された。しかし女王さまは、アリスに直

接「死」を宣告する。アリスに直接は害をなさないニセウミガメでさえ消された以上、死をアリスへもたらす者など「幼児向け」としては以ての外とされている可能性がある。ただし、物語のクライマックスに関わるハートの女王さまを完全に消去することは難しい。そこで性格を変化させ行儀よく振る舞わせることで、アリスに死が極力近づかないようにしていると言える。

作者たるキャロルは幼児向けである『子ども部屋』でも、ハートの女王さまと「首を切れ」という口癖を消し去りはしなかった。しかし日本の翻訳には、アリスをより礼儀正しく振る舞わせ女王さまを怒らせないものが存在する。この変化により、ハートの女王さまはアリスに死をもたらす者にはならなくなる。このようにして現在の日本では、冒険の最後、アリスに最も接近する「死」の脅威を取り去ることで、読者である子どもに死というイメージを読み取らせづらくしている。

4　考察とまとめ

前節の分析・比較を表２にまとめた。『不思議の国』で何らかのイメージを持っていた場面が、幼児向けにキャロル自身が改訂した『子ども部屋』でどう変化したか、また日本の幼児向け翻訳ではどう変化したか、そしてその結果現れたイメージを記した。

表からは、日本の幼児向け翻訳では登場人物・場面のイメージが幼児に相応しくないと判断された場合、削除という選択肢が存在するとわかる。一方作者キャロルは登場人物や場面を存続、あるいは相応しくないとした部分を一部変化させイメージの希薄化を試みている。「削除」は単純な変更だが、原作者が行っていない以上、日本の翻訳者独自の方法である。また表中太字で示した幼児向け翻訳における四つの変化は、キャロルが行った『子ども部屋』への改変とは明らかに異なる効果を内容に与えるものでもある。

表２　幼児向けに変化した部分のまとめ

場面	キャロル作『不思議の国』におけるイメージ	キャロル作『子ども部屋』に見られた変化	日本の幼児向け翻訳に見られた変化（数字は表１のリスト No.）
イモ虫	アイデンティティの問題を投げかける存在	変化（アリスに対し親切に）	変化（アリスに親切になるなど）：2, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 16, 19, 20, 21, 23, 24, 26 削除：1, 3, 14, 15, 17, 18, 22, 25
公爵夫人	我が子に役割を押し付け、虐げる母親	存続（赤ん坊を投げつけるなど）	**変化（無害な母親になるなど）**：1, 6, 11, 15, 18 削除：2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 16, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25
お茶会	流れる時間への反感	変化（時間の話題が消失）	**変化（時間の話題が消失する、開催の目的が出現するなど）**：5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 26 削除：9, 16, 25
ニセウミガメ	死の要素をもつ者	変化（食材であるという事実の曖昧化）	**変化（明るい雰囲気に）**：1 削除：2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26
女王さま	直接的に死をもたらす者	存続（「首をはねよ！」の口癖）	**変化（「首をはねよ！」と言わなくなるなど）**：1, 15, 23, 25

四つの独自の変化はいずれも、「削除」のみの場合と比較して場を穏やかにするものである。変化後の世界で主人公アリスは、よりスムーズかつ平穏に他の登場人物とコミュニケーションを図ることができる。従って、幼い読者はより落ち着いた気持ちで物語を聞く、あるいは読むことになる。どの変化も、物語を体感する幼児がアリスと共に、不思議の国をより平穏な気持ちで命の危険なく旅することと繋がっているのである。日本の翻訳者が『不思議の国』を「幼児向け」に翻訳した際、キャロルと大きく異なるのはこの点である。

キャロルの『子ども部屋』には、０～５歳を対象としてさえ穏やかでない場面も多い。日本の「幼児向け」作品ではそうした不安をもたらすイメージは相応しくないとして削られ、代わりに平穏で安全なイメージが付加さ

れる。この過程こそが作品を「幼児向け」にするために行われる配慮である。従って現在、日本で「幼児向け」として作品が出版される際、内容としては「穏やかさ」に重点が置かれると言える。その結果、命の危険など不安をもたらすイメージを排除し、アリスと一緒に物語の世界を体感する子どもが終始、心身ともに安全であることを目指す配慮がなされている。たとえ作品が原作と異なるストーリー展開となろうとも、「幼児向け」の本であるという立場が優先されるのである。

今後の課題としては、分析対象の拡大が必要と考える。今回抽出された「幼児向け」という考え方には「女の子」、特に『不思議の国』の主人公アリス個人の側面が強く出ているおそれがある。この偏りをなくすため、他の女の子が登場する作品や男の子が主人公の作品における「幼児向け」の考え方の分析も必要となるだろう。

【註】

（1）『不思議の国』の翻訳が他の児童書に比較して突出していることはたびたび言及されてきたが、例えばその状況については、児童文学翻訳大事典編集委員会編（2007）を参照のこと。

（2）『不思議の国』出版の2010年以降の具体的な動向については小坂田（2019）、特に図2を参照のこと。

（3）第二版ではあるが、実際は世に出回った最初の版である（木下 2013：252-253）。

（4）削除あるいは変化が見られた作品のリスト番号については、後述の表2に全体をまとめた。

（5）このエピソードはキャロルに関する研究でも多く言及されており、例えばガッテニョ（1997）を参照のこと。

（6）日本の幼児向け翻訳作品の「たんじょうびでない　ひを　おいわいする」という言葉は原作にないが、ディズニー映画『不思議の国のアリス』でのお茶会の場面の台詞と、そこの挿入歌の内容を参照して書かれたと考えられる。ディズニー映画の影響が色濃く現れたシーンであるとわかる。

（7）この場面は訳の難しい詩などが多いため、幼児向け日本語翻訳では省かれた可能性もある。

【参考文献一覧】

安藤聡, 2006,「一八六〇年代のファンタジー―『不思議の国のアリス』を中心に―」『文学』岩波書店, 2006年７，８月号, 35-44

カーペンター&プリチャード, 1999,『オックスフォード世界児童文学百科』, 神宮輝夫監訳, 原書房（Carpenter, H., Prichard, M., 1984. *The Oxford Companion to Children's Literature*, Oxford：Oxford University Press）.

Carroll, L, 1886, *Alice's Adventures in Wonderland*, London：Macmillan and Co. Limited. 1886.

Carroll, L, 1890, *The Nursery "Alice"*, London：Macmillan and Co. Limited.

千森幹子, 2015,『表象のアリス　テキストと図像に見る日本とイギリス』法政大学出版局.

ガッテニョ, 1997,『ルイス・キャロル　AliceからZénonまで』, 鈴木晶訳,法政大学出版局（Gattégno, J, 1974, *Lewis Carroll：une vie, d'Alice a Zenon d'Elee*, Paris：Editions du Seuil）.

児童文学翻訳大事典編集委員会編, 2007,『図説　児童文学翻訳大事典』大空社.

金子史彦, 2018,「『不思議の国のアリス』を通して学ぶ英文を和訳する事の特性―言葉遊びを中心に―」『比較文化研究』131：41-50.

川端有子, 1990,「非在の庭　ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』をめぐって」『Tinker Bell』日本ルイス・キャロル協会, 36：13-23.

川端有子, 2013,『児童文学の教科書』玉川大学出版部.

木下信一編, 2013「ルイス・キャロル書誌」安井泉編,『ルイス・キャロルハンドブック：アリスの不思議な世界』七つ森書館, 247-262.

小林絢子, 2004,「Pun翻訳の比較検討：「不思議の国のアリス」の場合」『英語英文学研究』東京家政大学文学部英語英文学科, 10：1-15.

小西弘信, 2017,「『不思議の国のアリス』における談話分析」『広島文教グローバル』1：23-35.

楠本君恵, 2001,『翻訳の国の「アリス」―ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論―』未知谷.

三上勝生, 1994,『〈世界〉にであうレッスン　『不思議の国のアリス』を読む』新曜社.

小坂田摩由, 2019,「現代日本の『不思議の国のアリス』―挿絵に見られる「かわいらしさ」をめぐって―」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』7：37-46.

笹田裕子, 2016,「幼年読者のための本に関する一考察―Lewis CarrollのThe Nursery Aliceにおける語りの技法―」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』37：17-28.

高橋康也, 1977,『ノンセンス大全』晶文社.

瀧靖之監修, 2018,『脳の専門家が選んだ　「賢い子」を育てる100のものがたり』宝島社.

内田伸子, 2014,「はじめに」内田伸子監修『やさしい思いやりの心をはぐくむ　女の子のお話』ナツメ社, 2-3.

安井泉, 2015,「解説―ルイス・キャロルが『子ども部屋のアリス』に込めた思い」キャロル, 安井泉訳『子ども部屋のアリス』七つ森書館, 110-121.